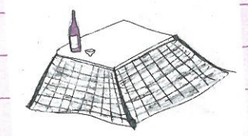
人に会いたい

西田征史
文とイラスト

第9回
遺品整理業者



遺品整理している間だけでも悲しみを和らげたい

今号が発売された頃には38歳になっている西田です。ハァ……結構歳をとりましたなぁ。高校時代は部活漬けの毎日だったのに、最近じゃ運動不足がたたって早くも四十肩気味だし、やたら指先が冷えるようになってきた。「これが老いか」とゆっくり死に向かっていることを実感しながら日々を生きています。んで、ふと思ったわけです。もし今、自分の命が尽きたら……残される者は……残される物は……？

今回〝お会いした人〟は遺品整理業者キーパーズの石川さん（33）。孤立死や自殺、病院で、など様々な経緯で亡くなった方の自宅に残った品（家財道具等）の片付けや清掃は勿論、買い取りや配送ほか、色々なサービスを行っているそうです。映画「アントキノイノチ」（11）で描かれたクーパーズのモデルになった会社と聞くとお分かりになる方も多いかと。残された物のエピソードを聞くことで「人が死ぬということ」ひいては「人が生きるということ」に迫れたら、と意気込んで早速インタビュー！

石川さんはもうすぐ入社3年目で、すでに100以上の現場に行かれているそうです。「この仕事に就かれたキッカケは？」「30歳までは屋形船の船頭のバイトをしてました。生活のことを考え、正社員になるか迷っていた時に社長の書いた本を読み感銘を受けて入社しました」。

ほぉ、まさか船頭のバイトからの転職とは！実は今回、職務にも興味はあるんですが、どういった人がどんな気持ちでこの仕事に就き、仕事を通して何を感じたのか、その辺りに興味があったんです私。こんなに爽やかで人当たりも柔らかい石川さんは一体どんな現場を見て来たんだろう？？？

「最初に現場に行かれた時は緊張したんじゃないですか？」「いえ、最初は病院で亡くなった方が部屋に残した物の整理だったんで」、「あぁ、じゃあ実際に孤立死された方の部屋に行った時は？」「それは少し緊張しました」、「他の部屋と何か違いがありますか？」「んー、においかな？」。亡くなってから発見までの時間によるそうですが、異臭が部屋に充満していることもあるそうです。強いて言うなら「腐った牛乳と腐った卵が混ざったにおい？」だそうで、日常生活で嗅いだことのないにおいらしい。「孤立死の方の部屋って共通点があったりしますか？」「コタツですかね。で、その周辺だけで生活できるように物が配置されてることが多いです」。ほとんどの家で、コタツの上にロト6、うめぼし、お酒、競馬新聞が置かれているとのこと。壊れた家電があることも共通していて「その辺りだけ時間が止まっている雰囲気がする」そうです。なんとなく生活が想像出来て、少し胸が苦しくなりました。

「部屋にあった遺品で一番驚いた物は？」「やっぱりアダルトグッズです」。やっぱりって？　え、それだけ多いってこと？　「AVがある方は多いですよ。量はまちまちですけど、一番多かった人は部屋に積み上げられてました」。かぁっ……処分してなかったってことは急な事故だったりするのかな。「AV以外にも器具なんかは？」「それもありますよ。何に使うのか分からないようなものとか。この前は同性愛の方で、部屋中に一冊3000円の高級ゲイ写真集がずらりと」。「そりゃあ遺族の方も驚きますね？」「ええ。しかもそれ、別れた奥さんからの依頼だったんです。部屋に10歳の娘さんも連れてきてたから、娘さんには隠したりして」。んー、一度は結婚したけれど自分の中にある同性愛に気付き離婚したのかな……なんて勝手に想像したりして。ちなみにその部屋には、離婚前に娘からもらった手紙が大事そうに飾られていたそうです。

「仕事をする上で心がけていることは？」「遺族の方に明るい気持ちになってもらおう、です。皆さん悲しみを抱えているので、自分が遺品を整理する間だけでも悲しみを和らげられたらと、なるべく湿っぽくならないように気をつけてます」。「この仕事をしていて嬉しかったことは？」「感謝の言葉や手紙をもらえると嬉しいですよ。貴方にやってもらってよかった、と言ってもらえた時はもう」。確かに、深い悲しみの中、死んだ親族の部屋をすぐに明け渡さなければならないとなった時にこういった方がしっかりと整理してくれるのは心強いんだろうな。「では、反対に仕事をしていて悲しかったことは？」「一度、依頼者を悲しませてしまったことですね。亡くなった方の大事にしていた庭の手入れを頼まれた時に、依頼は〝手入れレベル〟だったのに認識の違いがあって、伐採してしまったんです。幸い、根本からの伐採ではなかったので最悪の事態は免れたんですけど、あの時は自分を責めました」と額に汗を浮かべ語る石川さん。心から遺族の悲しみを和らげることを願っているんだと感じました。

そんな彼のカラオケの十八番はブルーハーツの「TRAIN　TRAIN」。趣味はベースギターを弾くことで、携帯電話の登録件数は100件ちょっと。〝人生で後悔していることは組んでいたバンドをうやむやに解散してしまったこと。大学を辞めてまで音楽で食っていくんだと活動していたのに、生活の為に始めた船頭のバイトがかなり指先を使う仕事だったことで頻繁に指を怪我し、ベースが弾けない日々が続き、結果的にバントとの距離ができていったそうです。まさか、そんな過去が……。

「これからの季節は孤立死された方の家に行くことが多くなると思います」と石川さんは汗を拭う。夏場は腐敗が進むので異臭騒ぎになり、発覚する機会が増えるそう。「現場で不思議な体験をしたとかあります？　霊的なものとか」「全然ないですよ。でも、同じ地区での依頼が続いたりはたまに。『あれ？　この前もこの辺来たな』って。最後に石川さんに聞きました。「この仕事で得たものは？」「色々ありますね、自分が人間的に成長出来ていると感じてます」。

最近、刑事ドラマを執筆しており、常に「いかに人間を殺すか」に思いを巡らせていたので、亡くなった人にまつわるその後の時間を知ることは不思議な感覚でした。ミュージシャンを夢見ていた人間が、生活の為に始めたバイトをきっかけに夢を諦めることになり、今は傷付いた遺族を癒やす職業に就いている。

意外な角度から「人が生きるということ」を学んだような気がします。

お話を聞かせてくれた、キーパーズ東京支店の石川伸哉さん（右）

にしだ・まさふみ
1975年、東京都生まれ。脚本家・演出家。自著『小野寺の弟・小野寺の姉』を自らの脚本・演出で舞台化。7月12日より、天王洲銀河劇場にて、8月22日から大阪・梅田芸術劇場シアター・ドラマシティにて公演決定。